

the Quint ザ・クインテッセンス essence

<https://www.quint-j.co.jp/>

DECEMBER
2018
vol.37

12

特集1

歯周組織再生剤 「リグロス」の臨床像

同一症例に行ったGTR法との比較からみえてくるもの

欠損主体の時代から
“口腔を生涯守る時代”の
歯科臨床総合誌

スマホ動画
MB2根管
攻略のポイント

特集2

診断の難しい歯原性歯痛

非歯原性歯痛を疑う前に

特集3

生理的な歯槽骨形態獲得 のための歯周外科

骨外科処置の有効性を検証する

隔月連載

再生療法—成功のポイント
再生療法の実際

Academy of Prosthodontics Foundation : Future Leaders in Prosthodontics 7 歯科医師としての“これから”を 考えた3日間

新名主耕平

東京新築業 一人はばば歯科クリニック
連絡先: 〒178-0002 東京都練馬区大塚町4-36-13



ACADEMY OF
PROSTHODONTICS
FOUNDATION

FLIP7

はじめに

今回、Dr. Sreenivas Koka(米国・サンディエゴ開業)より、Academy of Prosthodontics Foundation Future Leaders in Prosthodontics 7(以下、FLIP7)に参加しないかとの打診を受け、2018年9月7~9日にKings College of London Guys Hospital(英国・ロンドン)で開催されたFLIP7に参加した(①)。

この会は、将来の各国での歯科補綴における人材育成を目的としたものであり、指導者にDr. Sreenivas Koka(②、③)、Dr. Frauke Müller(④)、Dr. Ken Nicholsonをはじめ世界中から著名な補綴医が指名され、受講生の指導にあたった。しかもその受講費は無料であった。

参加者は世界各国より招集された補綴医22名で、30~40代の層ののりつつある世代が集められていた。参加国は、南アフリカ、ギリシャ、スペイン、スウェーデン、米国、英国、トルコ、ヨルダン、ドバイ、スイス、フランス、日本と多岐にわたっており、休

憩時間や食事時間など、各国の歯科事情について聞くことのできるいい機会であった。

1日目

講義の内容は、“歯”についての内容はまったくなく、これからどのような勉強をどこで、誰から学べばいいか? 自分が学んだことをいかに世界に共有すべきか? それを、どのような意味をもつのか? というテーマで各国の補綴医が各カテゴリーで講演した。16人の講師から講義をしていただいたが、なかでも、とくに興味深かった講義を、以下に記す。

「世界にあなたの経験、知識を広めよう、
編集長からの見解」

Dr. Steven Rosenstiel(The Journal of Prosthetic Dentistry編集長)

Dr. Steven Rosenstielは言わずと知れた、「The Journal of Prosthetic Dentistry」(以下、JPD)の編集長である。数か月前に筆者の論文がJPDからリジェ

クトされたばかりで、複雑な思いだったが、とても面白い内容だった。PubMedで検索可能なImpact Factorのついた雑誌であっても、査読色の強すぎる雑誌には投稿しないほうがよい、というメッセージは、私の心にとっても重いた。また、どんなにいい考え、テクニック、臨床症例をもっていても、共有しなければ学問ではない。誰が非でも論文を通じて、世界と共有しなくては歯科のリーダーとしての資格はないといった、かなりメッセージ性の強い講演だった。

「世界レベルのスピーカーになるために」
Dr. Ana Ferro(ポルトガル、Maloクリニック)

Dr. Ana Ferroは、日本でもおなじみの先生かと思われるが、世界中を飛び回っているMaloクリニックの歯科医師の1人である。演題が演題だけに、どのような講演をなさるのかとても興味があったが、実際、予想を上回る力強い講演だった(⑤)。なぜ歯科医師として働いているの



①ロンドン市内



②レセプションパーティーで挨拶するDr. Koka



③Dr. Kokaの講演風景

Dr. M. Zbarと筆者。
とても情熱的だったDr. Ferroの講演風景。



Team Plutoのメンバーと、左から2番目が筆者。
2日講演生員での集合写真(休憩中撮影)。



か? 患者の幸せをわれわれがいかに感じて、共有できるか? 自信をもつためにはいかにあるべきか? というポイントをわかりやすく説明していただいた。女性の先生だが、堂々として、かっこよく、歯科医師であることに性別は関係ない、といった内容であった。ご講演後に45分の休憩があったのだが、筆者の質問にもていねいに答えていただき、最後に握手をしていただいた筆力がとても強く、情熱を感じた。

「創造的であるために、発見・開発の鍵とは」
Mr. Frank Golding (MIT 研究員)

Mr. Frank Goldingは、今回歯科医師ではない唯一の講師であった。日ごろ、1つの分野でしか仕事をしていないわれわれが、いかに発見・開発といった将来につながる仕事ができているかについてや、日々の業務に忙殺されてはいけない、次(将来)につながる創造的な仕事をしなくてはならない、そのために何をすべきなのか? という点について講義をしていただいた。面白かったのは、頭の体操というプレイクタイムである。1つの場に各参加者が触れた後、いかに早く戻るか? というものであった。参加者全員で相談して考えた方法で数回トライしたが、相談するうちにどんどんいいアイデアが出され、最後は新記録を出すに至った。

歯科とは一見関係がなさそうに感じるが、1つひとつの歯科処置にも同じことが当て

はまる。日々の歯科臨床の身近なところに見えない忘れ物があることを痛感した。多くの講師からメッセージをいただき、たくさんインスピレーションをいただいた。

2日目

2日目の夜、London Bridge Hotelのレストランでパーティーが催され、各国の参加者、講師の交流が行われた。ここで、やっと各国の歯科事情について情報収集ができた。さすが、参加者は(筆者を除き)、各国を代表する精鋭の集まりといった状況で、新しいCAD/CAM技術の臨床応用法や、接着の新技术についての意見交換が活発になされた。

なかでも意外だったのが、ギリシャの歯科事情である。ほとんどの歯科医師が女性であり、男性は大部分が大学勤務をしている。ギリシャの歯科開業医はほぼ女性であったことである。お話をうかがったDr. Theodora Diamantatouは、2軒の歯科医院を女性スタッフのみで切り盛りしている知的できれいな方で、言葉に自信がみなぎっていた。

3日目

3日目の最後に、各参加者が4~5人ずつのグループに分かれてチームを構成し、先に出されていたテーマについて事前

に話し合った内容の発表会が行われた(巻)。テーマは、いかに歯科が世界に人間性を与えられるか? それにはどのようなことが重要か? あなた方の歯科における成功はどのようなものか? であった。

非常に難しいテーマでありながら、事前準備もありスムーズに進んだが、感銘を受けたのは、参加者の先生方全員が、人は歯科治療を受ける権利を人権と同じように所持しているべきだ、という概念をもたれていることだった。もちろんほとんどの先生方の国の歯科事情は、日本のように保険治療といったものはなく、支払い能力に差がある。だからこそ、いろいろな選択肢と治療方法をもたなくてはならない、という強い信念に心を打たれるとともに、「保険治療とは何か?」について考えながら日常を過ごしている筆者にとって大きな衝撃だった。

おわりに

今回、FLIP7に参加させていただき、著名な各国の歯科医師が、「歯」以外のことで、ここまで熱く話をされることに感銘を受けるとともに、自分がこれから何をしなければならないのか? を明確にさせていただいた数日間だった(巻)。最後に、参加に際して快く許可をいただいた、理事長の金田和彦先生、筆者の不在の間に医院を切り盛りしていただいたスタッフに感謝の意を表します。